

フーコーの「エピステーメ」「狂気」とラカン理論の接点から考える コミュニケーション研究の主体

In Search of Subject in Communication Studies through the Connection
between Foucault's "Episteme" and "Madness" and Lacan's Theories

北 本 晃 治

Koji Kitamoto

Abstract

Abstract: In Communication Studies, "subject" is normally considered to be the conscious agent of behavior. According to Lacan, a conscious agent is a pseudo-existence. Meanwhile, Foucault explicated "madness" as being transformed interactively with episteme from the Medieval-Renaissance period to the Classical period and to the Modern period. The result is the self-reflexive subject in the Modern age. This paper explores the connection between Foucault's notions and Lacan's work, thereby to yield an essential perspective for uncovering the characteristics of the subject in Communication Studies.

Keywords: Subject of Communication Studies, Foucault's Episteme, Madness,
Lacan's Theories

1. はじめに

ラカンとフーコー。ともにコミュニケーション研究における主体概念を考察する上で、極めて重要な視座を提供しているにも拘らず、それぞれに特有の難解さから、この分野において、それらの関連性について積極的に議論される機会は、限られたものとなっていたように思われる¹⁾。また、両者の関係性についても、キリスト教の司牧者権力を批判するフーコーと、その現代的展開であるカウンセリングや福祉ケアとも関連する精神分析におけるラカン派との位置関係は、それぞれ歴史的な文脈と人間の欲望を焦点化する対照的なものではあるものの²⁾、主体存在の表象不可能性を考慮する点においては共通しており、コミュニケーション研究における主体概念を重層的、多次元から把握する端緒として、それぞれの接点を探ることには、大きな意味があると考えられる。特に、フーコーの「エピステーメ」を巡る歴史的な議論と「狂気」概念の展開は、ラカンの人間の欲望と言語表象との関係性と、深く通底する部分があるように思われる。そこで本論では、まず、フーコーの「エピステーメ」の歴史的転回の流れと「狂気」概念とをpushした上で、それらがラカンの諸理論とどの様に関連するのかについて検討し、さらに今後のコミュニケーション研究における主体概念をどのように捉えるべきかについて考えてみたい。

2. フーコーの理論について

コミュニケーション学におけるレトリック研究者の多くは、フーコーの『監獄の誕生』³⁾や『性の歴史』⁴⁾を取り上げて、「権力」や「生政治」と言った概念には注目してきたものの⁵⁾、コミュニケーション研究へのその潜在的重要性にも拘らず、『言葉と物』⁶⁾や『狂気の歴史』⁷⁾については、余り言及してこなかったように思われる⁸⁾。以下では、それぞれの書著より、「エピステーメ」と「狂気」概念について、簡単に押さえておくことにしよう。

2.1. エピステーメ

フーコー（1974）は、人間の認識のあり方を根底で規定している、一般には無意識的知の枠組みが各時代に存在し、それをギリシア語で「知」を意味する「エピステーメ」という用語で表す。我々の認識は、この「エピステーメ」によって、先験的に、歴史、文化的に形作られており、中世以降の西洋の歴史の中では、三つの「エピステーメ」が見られるという。それらは、15、16世紀の「中世・ルネッサンス」、17、18世紀の「古典主義時代」、そして、19世紀以降の「近代」に特有のものである。

第1の「中世・ルネッサンスのエピステーメ」の特徴は「類似」である。この時代の自然物の認識は、類似性の視点から秩序づけられており、それは「適合」「模倣」「類比」「共感」という4つの形式をもつ。ここでの関係性は、自然物の外徴を解釈することで生じ、無限の解釈の連鎖を可能とする。

第2の「古典主義時代のエピステーメ」の特徴は、「一致」である。これによって生じる「同一性と相違性」に基づき事物を秩序立てるのが「タブロー（表）の空間」であり、その幾何学的に構成されたグリッドを通して世界が分節化される。この分類と「一致」することが真理の条件となる。

第3の「近代のエピステーメ」では、「タブロー（表）の空間」で意味を規定する超越的なまなざしを取り払われる。そこに個々の身体を持ち、知にとつての客体であると同時に、自身を再帰的に対象化して認識する主体でもある人間が登場する。ここで誕生した「人間」という概念は、事象を秩序づける「タブロー（表）の空間」の崩壊を帰結し、同時に、その認識の限界性の奥に物事の深層を措定する、新たな知の可能性を構成する端緒ともなつたと考えられる。

2.2. 狂気

フーコ（1975）は、「中世・ルネッサンス期」に数多く登場した「狂気」をテーマとした文芸作品の中で、ボッシュ等の「阿呆船」の描写を取り上げる。そこには終末論的な死のイメージと、馬鹿、間抜け等の阿呆のイメージの両方が表されており、悲劇的要素と批判的要素の両方が見られる。「古典主義時代」には、癩患者の空白化から、癩施療院から一般施療院への行政的移行が生じる。そして、そこには社会的治安維持のため、「狂人」と「貧困者」が「監禁」されるようになり、彼らが以前に持っていた「神秘性」や施しに対する「慈善」といった宗教的意味合いが薄れる。一方で「狂気」は、デカルト的主体による思考の前提として、予め排除され、「非理性」として位置付けられるようになる。「近代」では、「非理性」として見なされていた「狂気」は他の要素から区別され、知覚の対象として、精神医学の客体となる。

3. ラカン理論について

それでは、ここでラカンの理論に焦点を移そう。ラカンの理論はどれも難解で多義であり、一義的な解釈では捉えることができない。理論自体が新たな解釈の余地を常に担保するような形式を含んでおり、個別の理論の理解はもとより、複数の理論間の関係性を定義することは容易ではない。ここでは、「思考」と「存在」をキーワードとして、「三界 (RSI)」「性別化の図式」「四つの語り」の各理論間の関係性について考えてみたい。勿論、それらは暫定的な一つの解釈に過ぎないが、フーコーとの関連性と、コミュニケーション研究における主体概念を考察する上での、有益な示唆を得るために必要な試みであると思われる。

3.1. 思考と存在

ラカン派精神分析の研究者・臨床家として著名なフィンク (2013) は、以下のような図を用いて、ラカンの主体とデカルト的主体の違いについて述べている⁹⁾。

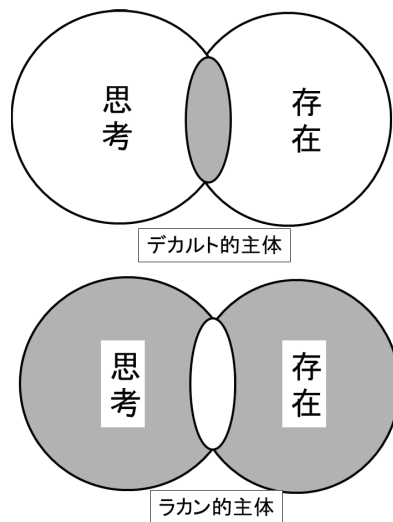


図1 思考と存在の関係性

デカルト的主体とは、“Cogito ergo sum”「我思う、ゆえに我あり」の「思考」(私は考える)と「存在」(私は存在する)が共役する中央の灰色部分で象徴される個人意識としての「自我」的なものである一方で、ラカンの主体では、それが反転する。すなわち、「存在」から分離し、自動的に作動する無意識的思考(私は存在しない)と、そのような「思考」から分離し、それ自身の存在を把持する意識的偽りの存在(私は考えていない)である。ラカンの主体は、これらの間の分裂として象徴される。

3.2. 三界 (R.S.I.)

ラカンの主体の「思考」と「存在」の分裂は、ラカンが指摘している三界、「現実界」「象徴界」「想像界」の後2者の関係性を示しているとも考えられる。下図は一般にこれらの関係性を示すものとして提示されるものを、後に他の理論を重ね合わせる都合上、左右を逆転させたものである。

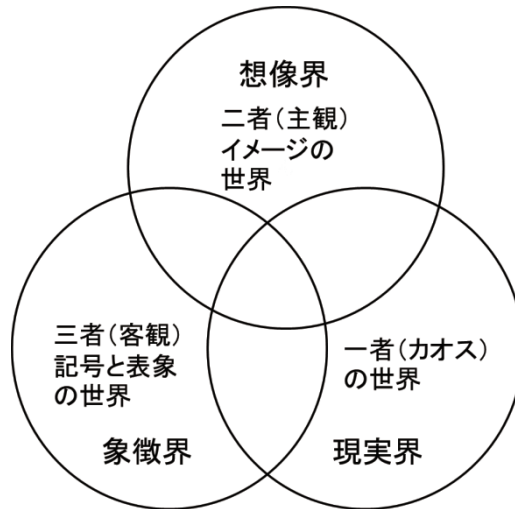


図2 ラカンの三界 (R.S.I.)

「偽りの存在」を示す「想像界」とは、二者の間で、互いのイメージを写し合う鏡像関係が無限に展開していく場であり、ここではまさに虚としての存在が生成される。「象徴界」では、そのような二者関係が記号によって代理表象されることで、第3の視点が成立し、表象関係がさらなる表象へと移行して無限の連鎖を生む。この運動の中で、主体の「無意識的思考」が生起すると考えられる。最後の「現実界」とは、前2者の根底にあって、主客分離以前の言葉では表象することの出来ないカオス的場を指している。

3.3. 性別化の図式

これらの「偽りの存在 (想像界)」と「無意識的思考(象徴界)」に対して、表象不可能な本質的主体との関係性を示すのが、「現実界」であり、前2者と後者との関係性(無関係性)の内実を描いたものが、以下の「性別化の図式」(図3) であると考えられる。

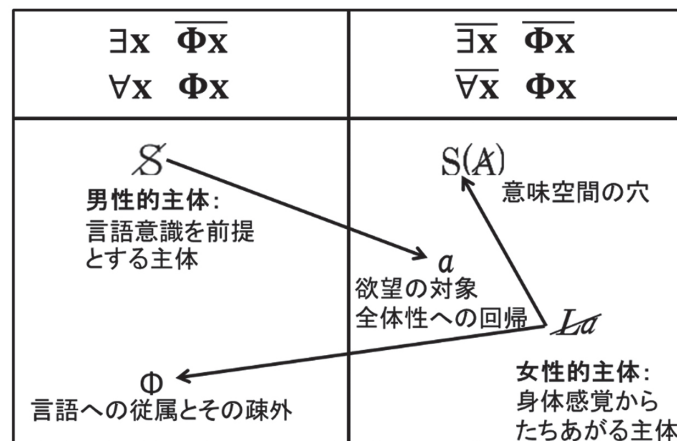


図3 「性別化の図式」

この図において、左側が男性的主体、右側が女性的主体を表しているが、欲望の対象 (原因) へと進む「 \mathcal{S} 」とは、言語意識を前提とした主体である一方で、「 La 」とは現実存在しない (外存在する) 本質的主体である。前者が前述の「偽りの存在」であるとするれば、後者はそれと対峙する (あ

るいは無関係の) 本質的、实际的、物質的存在と言えるであろう¹⁰⁾。「無意識的思考」は、この図の左下に位置付けられるものと考えられる。「 La 」は、それぞれ「象徴界」との接点にファルス記号を表す「 Φ 」と、「想像界」との接点に言語の物質性や実体に関係する他者の欠如のシニフィアン「 $S(A)$ 」(イメージの中に浮かび上がってくる染み)へと進むベクトルを持つ。

3.4. 四つの語り

「性別化の図式」における「 \mathcal{S} 」→「 a 」へと進むベクトルは、具体的な語りの位相転換によって媒介されている。それらは、「 \mathcal{S} 」→「 S_1 」(ヒステリーの語り)、「 S_1 」→「 S_2 」(主人の語り)、「 S_2 」→「 a 」(大学の語り)、の三つであり、これらはさらに、「 a 」→「 \mathcal{S} 」(分析家の語り)と言うベクトルによって円環をなす¹¹⁾。「ヒステリーの語り」では、不安などの無意識の直接的表出、「主人の語り」では、言語意識(自我)による権威的発話、「大学の語り」では、言語記号によるある次元における客観的記述、「分析家の語り」では、人間の無意識的思考への再帰的介入、がそれぞれの属性である。これら一連の流れは、人間の生誕後に生じる片言の無意識的語り→もの心がついて以降の自我による主観的語り→対象となる次元での共通認識を得るための客観的語り→物ではなく、主観を持つ人間自体(心・精神)を再帰的な対象とする語りと、一般的な個人の言語能力の獲得、発達プロセスとも平行な展開を示していると考えられる¹²⁾。

3.5. 理論間の関係性

これらラカンの諸理論間の関係性を筆者が纏めたものが、以下の図4である。

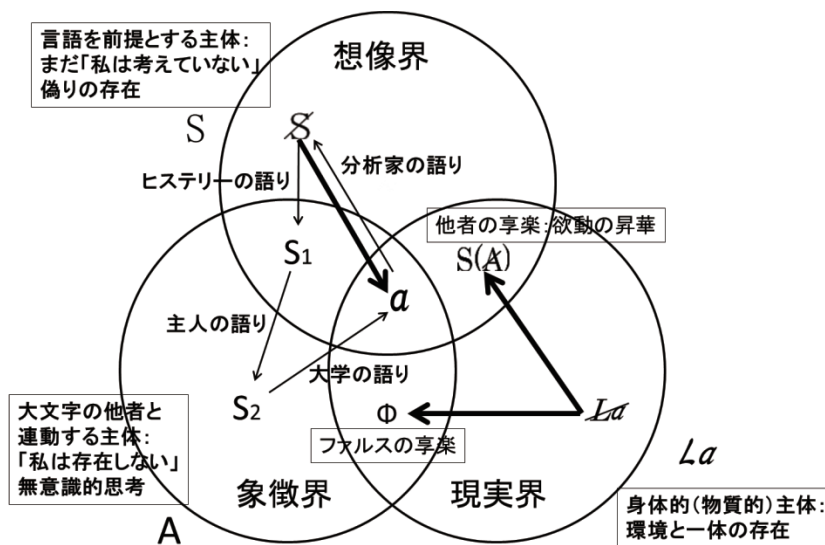


図4 三界 (R.S.I.)、性別化の図式と語りの位相

生まれたばかりの「自失茫然とした」¹³⁾ 主体「 S 」が、言語機能に封印されて「 \mathcal{S} 」となり、「想像界」に「偽りの存在」として登場する。これは、さらに言語機能の刻印「 S_1 」(原初のシニフィアン: 自我の象徴)を媒介として、「象徴界」へ「 S_2 」(言語表象)の連鎖として展開していく。ここは大文字の他者「 A 」(全ての表象体系を司る審級)による「無意識的思考」の作動する領域である。「 \mathcal{S} 」→「 S_1 」では、身体におけるイメージ的表象活動である「ヒステリーの語り」が、「 S_1 」→「 S_2 」では、個人の主観的言語活動である「主人の語り」が、さらに「 S_2 」→「 a 」では、個人の主観から捨象されたいわゆる客観的言語表象が、何等かの未知の存在として欲望の対象となる「 a 」に向か

う「大学の語り」が、それぞれ作動する。「 S 」から「 a 」へと直接至る太線は、「男性的主体」の機能であるが、これは前述の3つの語りの様式によって媒介され、「無意識的思考」を生む「象徴界」を経由すると考えられる。この太線を逆に進むのが「 a 」→「 S 」の「分析家の語り」で、無意識的言語主体が再帰的に捉え直される働きである。これらの「想像界」と「象徴界」の奥底にあるのが「現実界」であり、環境と不可分の物質的、実質的存在「 La 」が、存在しない（表象特定不能の）「女性的主体」「 La 」として仮構されるのがこの領域である。「 La 」から出発する2本の太線の一方は「象徴界」との接点で、言語への従属と疎外を示すファルス記号「 Φ 」によって、他方は「想像界」との接点で、イメージの中に浸潤してくる「染み」（言語の物質性）として、象徴作用の欠如そのものを表すシニフィアン「 $S(A)$ 」によって、それぞれ「現実界」と媒介されていると考えられる。このように見ても、「三界 (R.S.I.)」「四つの語り」「性別化の図式」のそれぞれの理論が、「思考と存在」の「意識性・無意識性」及び「虚実性」との関連において、相互に規定し合うものであることが分かる。

4. フーコーの概念とラカン理論との関係性

それでは、これまでに取り上げたフーコーの「エピステーメ」と「狂気」概念と、ラカン理論との関係性について考えてみよう。

4.1. エピステーメとの関係性

前章において、想像界と象徴界の間を巡って、4つの語りの位相（四つの語り）の転換が生じることを指摘した。フーコーの三つの時期（中世・ルネッサンス、古典主義時代、近代）を規定するそれぞれの「エピステーメ」は、これらの4つの語りの位相を転換させる働きを持つものと考えられる¹⁴⁾。それらのポイントを示したものが以下の図5である。

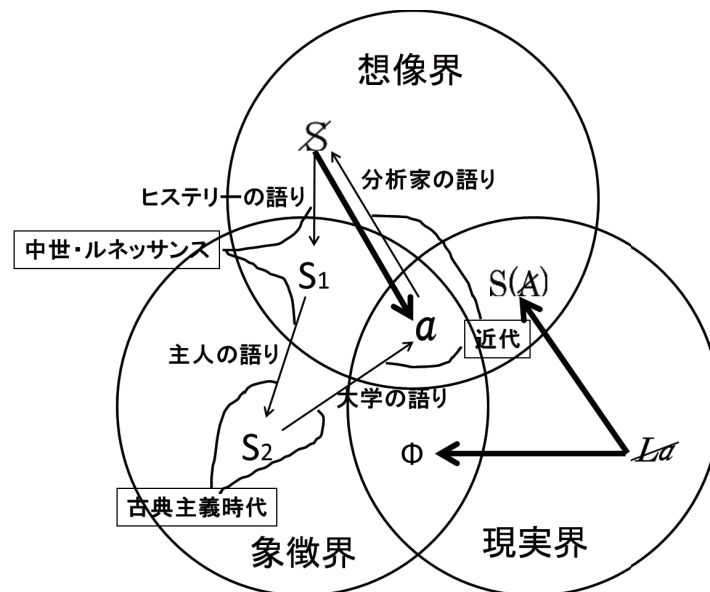


図5 語りの位相と時代展開

「中世・ルネッサンス期」のエピステーメは、想像界の特徴である二者の「類似」関係によって反映し合うイメージの世界を、象徴作用によって、発話主体（自我主体）が言説へと映し出す働きを持つものと考えられる。「古典主義時代」のエピステーメは、そのような発話主体を抑圧し、「一致」によって生じる「同一性と相違性」によって形作られた言語の表象体系（タブローの空間）によって整

地する作用を示す。さらに「近代」のエピステーメでは、そのような言語の表象体系（タブローの空間）を成立させていた超越的な視点が崩壊し、これまで表象不可能であったもの（人間の深層）が問題化される。これら3つのエピステーメの特徴は、図の中で結び付けられているように、それぞれ「ヒステリーの語り（無意識的主体 \mathcal{S} ）」から「主人の語り（自我主体 S_1 ）」へ、「主人の語り（自我主体 S_1 ）」から「大学の語り（言語表象 S_2 ）」へ、「大学の語り（言語表象 S_2 ）」から「分析家の語り（表象剰余 a ）」へ、の転換を促す働きとして理解できるように思われる。

4.2 狂気との関係性

フーコーの指摘する「狂気」とは、ラカンの図式の中の現実界と想像界が交差する地点にカオスイメージとして生じてくる表象不可能な宗教的存在、「 $S(A)$ 」と深く関連するもののように思われる。これを始点として、3つの時代区分のエピステーメに従って分節化されていく様子を示したものが以下の図6である。

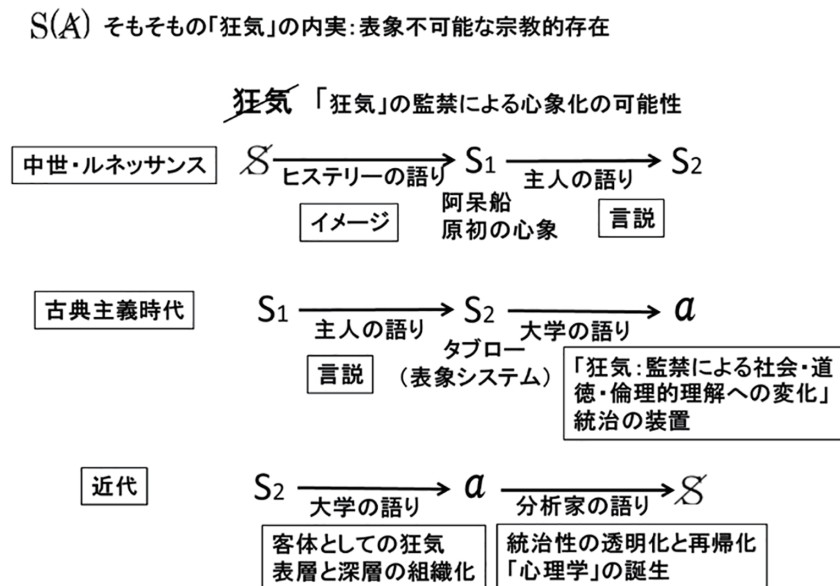


図6 フーコー「狂気」三つの時代的展開

この「 $S(A)$ 」が何らかの形でその意味を展開できるようになるためには、カオスイメージが個別化されて、無意識的主体「 S 」として想像界の奥に位置づけられる（原抑圧）必要がある。それがさらに再抑圧（斜線を引かれた「 \mathcal{S} 」: 原初的監禁）されることで、意識化の対象となり、表象体系のずれ（「 S_1 」→「 S_2 」）を生み出していくことができるようになると考えられる。「中世・ルネッサンス期」の文芸作品の中に登場する「阿呆船」とは、様々な無意識的「イメージ」が「ヒステリーの語り」によって析出してくる中であって、「狂気」が意識的なまとまりをもった言語表象「言説」として展開するための端緒となるものであった。「古典主義時代」では、「狂気」は意識的思考を担保する「理性」の外部に「非理性」として位置付けられるようになる。これと共犯関係にあるのが、「監禁」というシステムの中に権力的統治性が忍び込み「タブローの空間」に影響を与えたことであろう。これによって「狂気」は宗教的存在から管理対象としての道徳的存在へと変質していくことになった。ここでは個々の発話者の権力が纏められ、「 S_1 」として「 S_2 」のシステム（大学の語り）の下に不可視的に定着したと考えることもできるであろう。「近代」では、「非理性」として括られていた「狂気」が、「理性」のさらなる介入を受けて、意識の客体となる。そこには人間の無意識

(深層)が措定され、精神医学や心理学の誕生へと繋がっていく。これは本来、言語表象が不可能な「*a*」を記述可能なものへと枠づけることで、人間の無意識「 \mathcal{S} 」へと迫ろうとするアプローチ（分析家の語り）である。

5. コミュニケーション研究における主体概念について

コミュニケーション研究における主体概念とは、一般に言説や行為の主体を指す場合がほとんどであるように思われる。すなわち、環境から独立し、自己意識に従って発言・行動する個人が対象となる。これはこれまでに論じた、デカルト的主体に相当し、ラカンの文脈から考えれば、「偽りの存在」ということになる。

統計的調査法に基づく研究はもとより、レトリック研究の手法においても、主体概念を細かく記述可能な形に規定していくことは、「狂気」を枠づけし、そこに深層構造を導き出して記述対象とする「近代」のエピステーメの延長線上にあるアプローチであると考えられる。このアプローチによって実は「狂気」や「主体」の出所、前章でいうところの「現実界」から切れた存在となり、極めて本質的な要素が失われることになる。

この主体概念をどう捉えるかということに関しては、「古典主義時代」から「近代」のエピステーメへと転回するに従って、「大学の語り」から「分析家」の語りへの言説の位相転換が生じることを指摘したが、そのあり方自体が重要な問題となるように思われる。この位相転換は、「 S_2 」→「*a*」から、「*a*」→「 \mathcal{S} 」という記号によって表される。ここで「近代」のエピステーメは、「*a*」を表層と深層に分割することで言語秩序の中へと組み入れ、「 S_2 」→「*a*」と「*a*」→「 \mathcal{S} 」という2重の位相から、「 S_2 」→「 \mathcal{S} 」と言う直接回路を紡ぎだそうとするものであると考えられる。しかしながら、「*a*」があくまでも記述不可能性を背負った存在であるとする、前者から後者への移行は、そのような存在自体が、言説の対象から、行為の主体へと転ずることを示している。対象としての「*a*」から、行為主体としての「*a*」。ここに、「近代」のエピステーメとどのように対峙すべきかについてのラカンの洞察が窺える。それは言語化不可能な主体が、自らの無意識的存在「 \mathcal{S} 」と再帰的に関わるそのあり方である。

フーコーの「狂気」概念の歴史的展開とラカンの「語り（言説）」と「主体」概念の位相転回は、その表象不可能性を根底に据えながら、「理性」と「非理性」、「意識」と「無意識」を巡って相互に関係、規定し合う点において、共通しているように思われる。我々はこの接点にこそ、コミュニケーション研究における「主体」概念を問い直す重要な鍵を見出すべきであろう。

6. おわりに

以上、本論では、コミュニケーション研究における主体概念を問い直す、より本質的な視点を求めて、フーコーの「エピステーメ」「狂気」概念とラカンの諸理論との関係性を考察した。フーコーは、提出している3つのエピステーメの間の因果関係については言及しておらず、それは、それぞれの歴史的な文脈間を超越的な視点から規定し、そこに歴史的な意図をくみ取ろうとするどのような恣意的、権力的な解釈をも認めないためであろう。しかしながら、「狂気」概念の変遷の過程には、それぞれの時代の「エピステーメ」とそれによって成立している権力構造との相互作用の痕跡が映し出されており、近代的な主体が成立してくる条件が示されていると考えることもできる。一方で、ラカンの理論では、表象体系の中に主体をピン止めすることに対する不可能性とその反作用に関する、深い洞察があり、そこには本論で議論したように、「狂気」概念の変遷の過程と通底する主体概念の展開が示されているように思われる。

一般にコミュニケーション研究の暗黙の前提となっている言説や行為の意識的主体が、歴史的な文脈

や表象体系の中でどのように析出されてくるのか、そしてそれが成立する無意識的前提とは何かを問うことは、対象となるコミュニケーションの諸要素間の相互作用を根底から考察するための重要な要件であろう。近代的主体成立の無意識的前提となっているフーコーの3つの「エピステーメ」と関係する「狂気」概念の変容過程と、主体の表象不可能性を前提とするラカンの諸理論との接点には、「主体」概念を考えるための本質的視点を開く可能性があるように思われる。今後も、このような視点からの継続的な議論が必要であろう。

注

- 1) 本論考は、2018年6月9日(土)、札幌医学技術福祉歯科専門学校で開催された日本コミュニケーション学会第48回年次大会でのパネル企画「歴史研究とレトリック研究の交錯点を探る—『狂気の歴史』を読む—」で筆者が行ったレスポンスに基づいている。
- 2) 同様の視点については、2017年6月3日(土)、京都ノートルダム女子大学で開催された日本コミュニケーション学会第47回年次大会でのパネル企画「レトリックにおける解釈の連鎖・表象・文化—『言葉と物』を読み直す」で筆者が行ったレスポンスでも指摘した。詳しくは、北本(2018)、及び日本コミュニケーション学会第47回年次大会プロシーディングス、16-17頁、参照。
- 3) フーコー(1977)。
- 4) フーコー(1986a)(1986b)(1987)。
- 5) 日本コミュニケーション学会第48回年次大会プロシーディングス、34-35頁。
- 6) フーコー(1974)。
- 7) フーコー(1975)。
- 8) 柿田は日本コミュニケーション学会第47回年次大会パネル企画「レトリックにおける解釈の連鎖・表象・文化—『言葉と物』を読み直す」で、NCAのレトリック研究における『言葉と物』の不在について、「Foucault」の検索全1041件の内、実際に考察している論文は2本しかない点を指摘している。
- 9) フィンク(2013)71頁。
- 10) 筆者は北本(2016)で、この言語的主体「*Œ*」と、全体的、環境的(女性的)存在としての「*La*」との関連について、映画のシチュエーションを用いて考察している。
- 11) 「四つの語り」について、詳しくは、ラカン(1985)を参照。筆者は、他、北本(2015)で、黒澤映画の『夢』をこの「四つの語り」を用いて分析している。
- 12) ヘッケルの「個体発生は系統発生を繰り返す」という言葉のように、個人の意識主体の生成過程は、語りの位相の転換とともに、時代的な意識過程の展開の歴史をなぞって産出されていると考えることもできるであろう。
- 13) 無意識的主体「*Œ*」は、常に言語によって部分的に表象されるのみで、常に表象されなかった自己存在からの「欠如感」という反作用を生む。その常在的な「欠如感」を瞬間的にでも埋め合わせようとする欲望から、次々と言語による表象行為(「*S₂*」の産出)を継続していくことが、ラカンにとっての「言語活動」の本質である。その行為が、「言葉による主体のドラマ」であり「存在欠如を試すこと」である(ラカン, 1981, p.102)。
- 14) 筆者は、北本(2017)で、3つの「エピステーメ」の特徴を、「中世・ルネッサンス期」では「主人の語り」に、「古典主義時代」では「大学の語り」に、そして「近代」では「分析家の語り」に関連付けて議論しているが、本論では、それぞれさらに、「ヒステリーの語り」から「主人の語り」へ、「主人の語り」から「大学の語り」へ、「大学の語り」から「分析家の語り」へと、「エピステーメ」のもつ語りの位相を転換していく働きにより注目している。

引用文献

- 北本晃治(2015)。「マス・メディアを活用したコミュニケーション教育の展開—黒澤映画『夢』とラカン理論「四つの語り」を題材として—」『帝塚山大学文学部紀要』第36号, 帝塚山大学文学部, pp.11-26.
- 北本晃治(2016)。「西洋的主体と異文化的他者の関連性を考える:映画『ラスト・サムライ』とラカン理論「性別化の図式」を題材として」『帝塚山大学文学部紀要』第37号, 帝塚山大学文学部, pp.1-13.
- 北本晃治(2018)。「フーコーのエピステーメとラカンの四つの語りについて」『帝塚山大学全学教育開発セン

- ター紀要第2号』帝塚山大学全学教育開発センター, pp.13-18.
- フィンク, ブルース (2013).『後期ラカン入門—ラカンの主体について』人文書院.
- フーコー, ミッシェル (1974).『言葉と物 —人文科学の考古学—』渡辺一民・佐々木明訳 新潮社出版.
- フーコー, ミッシェル (1975).『狂気の歴史 —古典主義時代における—』田村俣訳 新潮社出版.
- フーコー, ミッシェル (1977).『監獄の誕生』田村俣訳 新潮社出版.
- フーコー, ミッシェル (1986a).『知への意志 性の歴史1』渡辺守章訳 新潮社出版.
- フーコー, ミッシェル (1986b).『快楽の活用 性の歴史2』田村俣訳 新潮社出版.
- フーコー, ミッシェル (1987).『自己への配慮 性の歴史3』田村俣訳 新潮社出版.
- ラカン, ジャック (1981).「フロイトの無意識における主体の壊乱と欲求の弁証法」佐々木孝次訳『エクリ
III』, 弘文堂, pp.295-345.
- ラカン, ジャック (1985).「ラジオフォニー」『ディスクール』佐々木孝次・市村卓彦訳 弘文堂.